

知られざる丸岡城

丸岡城跡発掘調査の最新成果 遺物編



弥生時代の出土状況(左)と、出土した土器(上)

本丸からは丸岡城に関する遺物だけでなく、弥生時代の遺物が見つっています。弥生時代の器台や広口壺の破片が出土したことから、かつての城山に弥生時代の墳丘墓があった可能性があります。平野にポツンとある丘は、弥生時代から利用されていたことが分かりました。

※器台：祭祀などで壺などを載せて使う

出土した遺物からわかること

16世紀から17世紀の遺物だけ？

丸岡城の天守は人が常について、生活するような施設ではありません。一方で、本丸では土師器皿だけでなく、伊万里焼や唐津焼といった陶磁器の生活雑器も出土していることから、人が常駐できるような施設があったことが伺えます。ところが、遺物の年代は16世紀後半から17世紀頃と限定的。ちょうど柴田勝豊が築城して、本多氏が領有していた時代にあたります。時代が変化したことで、天守のある本丸がよりシンボリックな役割になり、日常生活が二ノ丸にあった御殿に移ったことを示しているのかもしれませんが。また、元禄8(1698)年には本多氏から有馬氏へ藩主が変わっていますから、藩主の交代とともに本丸の役割が変わった可能性もあります。

出土する遺物から、丸岡城を舞台とした人々の日常を推測することができそうです。

天守で使われていない石瓦や釘は何を語る？

天守は江戸時代から現代まで残っている貴重な遺構です。つまり、現代の天守で使われていない形の石瓦や釘といった建築資材が出土すると、本丸にあったほかの建物に使われていた可能性が考えられます。

調査では棟瓦や鉄釘が出土しています。これらの建築材料から当時の建物が推測できれば、往時の景観を推定することもできるかもしれません。

〇あとがき〇

遺物は遺跡の時代を知る重要な手がかりです。丸岡城の調査では笏谷石製の石瓦を中心に大量の遺物が出土しました。とはいえ、調査された面積は全体のごくわずか。これからの調査で一体どれほど出土するか、想像もできません。これからもこうした資料を整理し、丸岡城の新しい情報を皆様にお伝えできるよう、努めていきたいと思ひます。

令和3年3月 編集・発行

坂井市教育委員会 文化課
丸岡城国宝化推進室

〒910-0231
福井県坂井市丸岡町霞町 1-41-1
電話：0776-50-2270
FAX：0776-50-2553
E-mail：bunka@city.fukui-sakai.lg.jp



坂井市教育委員会 丸岡城国宝化推進室

丸岡城跡から出土した遺物

丸岡城の発掘調査では石瓦をはじめとしてテンバコ約 250 箱分の遺物を採取しました。ほとんどは石瓦で、陶磁器や土師器皿、鉄釘、少量ですが貨幣も出土しています。

これらの遺物は遺構の時代を知る手がかりです。今後も整理して展示に活用されます。



本丸の発掘調査で検出した遺構

遺物はピット（柱穴）や土坑から出土しました。図は天守の下、本丸の調査で検出した遺構の配置図です。規則的に並んだピットからは建物の規模等を、出土した遺物からは建物のおおよその時期が推定できます。

江戸時代の照明器具：灯明皿

土師器の皿は赤褐色で直径10cm程度の小皿です。油を入れて芯を浸し、火をつけて灯りをとす灯明皿として使われていました。縁に黒いスがついているのはそのためです。

16世紀から17世紀ごろ、ちょうど丸岡城が整備されたころの時期と合致します。



丸岡城のシンボル・石瓦はリユースしてた？

本丸では大量の石瓦が出土しました。石の瓦は粘土の瓦と違って、切ったり小さくしたりして再利用することができます。実際に、発掘調査でも短く切って加工したものや、長さを継ぎ足すための短い瓦などがみついています。江戸時代には、複数回の屋根修理があった記録がありますから、その都度新しいものを作るのではなく、既存のものを再利用して修理していたことがわかります。当時の工夫や苦勞が垣間見えるユニークな遺物と言えるでしょう。



切った跡が残っている石瓦

天守だけではない 本丸の建物あれこれ

調査では普通の丸瓦よりもひとまわり大きい丸瓦が出土しました。天守の屋根には同じものは使われておらず、類似例を調べると和歌山県高野山、松平秀康霊屋の隅棟に同様の事例が見つかりました。松平秀康は徳川家康の息子が初代福井藩主。高さ4mほどの霊屋はすべて笏谷石で作られています。本丸にも同じような大きさの建物があったのかもしれませんが。

また、塀の棟を抑える石瓦も見つかり、サイズから塀の大きさ等が推測できるかもしれません。



丸岡城で出土した隅棟の石瓦（左上）と、和歌山県高野山の松平秀康霊屋の屋根